

明治大学人文科学研究所紀要 第50冊 (2002) 261—276

十八・十九世紀におけるウェールズ語の衰退と教育

鈴木 哲 也

Description of the Decay of Welsh Language in the Eighteenth and Nineteenth Century

SUZUKI Tetsuya

Since the second half of the eighteenth century, the number of people who speak Welsh language has decreased. According to the 1991 census, only less than 20% of the total population of Wales claims to have some knowledge of Welsh. Although the decrease of the number of speakers of Welsh is caused by some factors, we can identify the industrialization of British society as the most crucial one.

It is difficult to state rightly what significance the decay of one language has to our modern or post-modern world. However, by analyzing the process of the decay of Welsh language, we can elucidate, first of all, what factors can have strong influence on the maintenance of a language or the regional culture, and, secondly, what the industrialization brought about in our modern world. In order to serve such purposes, this paper tries to describe the process of the decay of Welsh language.

One of the crucial factors that caused the decay is the demographic shift in Wales since the mid eighteenth century. As is well known, England is the first nation that achieved the Industrial Revolution. The industrialization brought about changes in the British society. As for Wales, coalfields were of great importance. Coalfields provided the main power source for the industrialization of Britain. Accordingly, great numbers of people flew into the coalfields and adjacent cities, not only from England but also from other European countries. This changed the traditional Welsh communities that had maintained Welsh language. Based on various data, we can see clearly the relation between the demographic shift in Wales and the decaying process of Welsh language.

The second factor that brought about the decay of Welsh language is the historical situation in which England and Wales were situated from the mid eighteenth century to mid nineteenth century. During the period, numbers of countries in Europe were reorganizing themselves as nation-states and some were seeking to establish hegemony over others.

At the turn of the eighteenth century, while Britain was organizing itself as a nation-state, it was exposed to the menace of French political power, especially the Napoleonic war. Britain, therefore, needed to integrate three traditional regions, England, Scotland and Wales, into one political and cultural entity, giving the newly organized nation-state a new unifying identity. In the process of establishing the identity, British government recognized the importance of religion, education and language and, gradually, governmental organizations strengthened the control over the educational system.

At the beginning of the nineteenth century, English language had already become the key to adapt to the new society, especially in the urbanized regions such as Cardiff. Consequently, Welsh people themselves were willing to have the opportunities to learn English, though they did not intend to abandon Welsh language.

Recently, it is said that the decaying process of Welsh language has stopped. However, we cannot be optimistic about the future of the language. Whether one language can survive or not depends, mainly, on the attitude of people who speak it. The decaying process of Welsh gives us information from which we still learn many things about modern societies.

《個人研究》

十八・十九世紀におけるウェールズ語の衰退と教育

鈴木 哲 也

序

近代的な国家制度が整備される過程で、それまで存在した多様な文化や言語の一元化を進める政策がとられ、豊かな地域文化・言語の発達が疎外された、という議論を近年の国民国家論において目にする。この議論には説得力があり、多くの事例に妥当するだろう。これから検討するウェールズ語衰退のプロセスについてみても、その議論には一定の妥当性がある。だが、同時に、ウェールズ語という一つの言語が衰退したのは、イングランドの支配的な政治勢力が、特定のイデオロギーのもとに文化・言語の多元性を抑圧したためである、といっただけでは単純すぎる。

ウェールズ語使用者の人口は、16世紀にイングランドの支配のもとにおかれて以来、減少しつづけた。その人口の推移を見ると、1536年という早い時期に the Act of Union によってイングランドの政治的支配下におかれたものの、19世紀半ばの時点では、それでも、六割程度のウェールズ語話者がいたと推測される。ところが、このウェールズ語人口が1901年には人口の49.9パーセントまで減少し、1951年と1991年の国勢調査によれば、それぞれ28.9パーセントから18.5パーセントへと減少している。国勢調査等の公的な資料に不備があり不正確な部分もあるが、16世紀半ばから19世紀半ばまでにおよそ40パーセントの減少、それから20世紀初頭までの50年に10パーセント、続く50年に10パーセント、その後の40年間に10パーセントの減少を示している。

さらに考慮しなければならないのは、ウェールズ語話者のなかに英語との二言語使用者がどのくらいの割合で存在したかという問題である。16世紀においては、当然ウェールズ語話者のほとんどがウェールズ語の単一言語使用者であったのに対して、1801年にはウェールズ語のみ、および、ほぼウェールズ語のみを使用していた人口は48.1パーセントになり、1851年にはそれが45.3パーセントへ、1881年には20.3パーセントへと減少している。こうした数値をみると、1851年以降におけるウェールズ語衰退の速度がそれ以前よりもきわだって速まっていることがわかる。

これは、当時の産業をささえる動力源であった石炭を産出する地域と当時拡大しつつあった海外貿易の拠点とに、多くの人口が流入したためにおきた現象であった（地図1・2参照）。ウェールズ語の衰退に影響したのは、イングランドによる政治的支配であるよりも、むしろ、産業革命にはじまり19世紀に急速にすすんでゆく産業の近代化と、それにとまなう社会構造の変化であった、というこ

十八・十九世紀におけるウェールズ語の衰退と教育



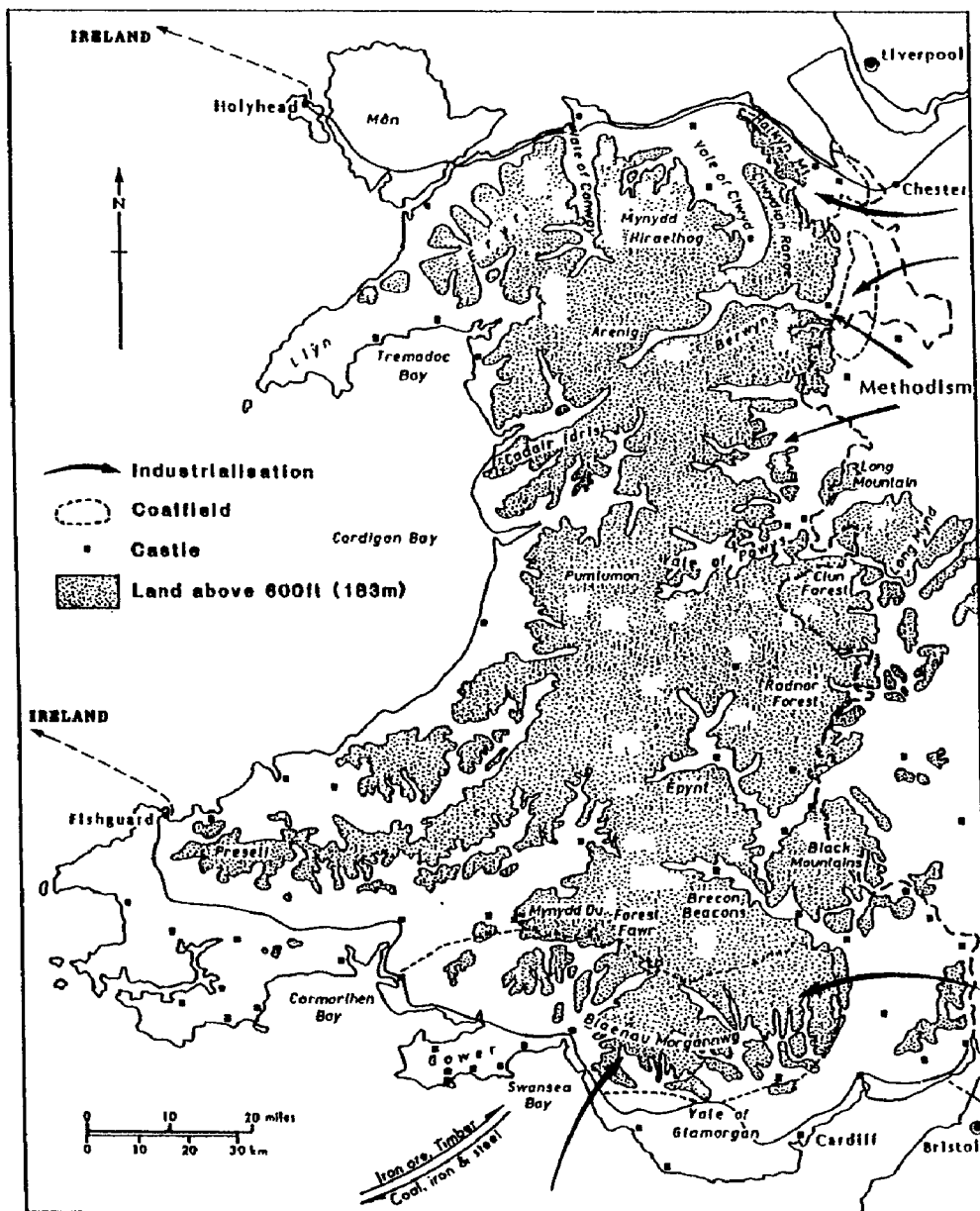
(Morgan, 1981より)

地図 1

とができる。本論文では、18世紀から20世紀における、ウェールズにおける人口動態とウェールズ語人口の相関性、および、当時ウェールズ語がどのように人々によってとらえられていたかを記述してゆく。

1 十九世紀におけるウェールズの人口と言語状況の変化

この章では主として18世紀から20世紀にかけての、ウェールズにおける人口の変化とそれともなうウェールズ語人口の変化を記述する。表1は18世紀中葉から20世紀初頭にかけて、ウェールズ内の様々な英国国教会の教区に設置された教会において、どの言葉を用いて礼拝等の行為が行われたかをまとめたものである。ウェールズ語の普及状況について正確な情報がえられるのは、国勢調査に言語に関する質問項目がおかれた1891年以降である。それ以前は諸種の資料をもとに推測する他は



(Coupland, 1990より)

地図 2

ない。そうした資料の一つが教会の業務記録である。表1は国教会の記録をもとに、さまざまな教区で宗教的儀式にウェールズ語、英語いずれが使用されたかをまとめたものである。さまざまな教区において使用されている言語がいつ頃変化したかをこの表で知ることによって、一般的にウェールズで英語が支配的な様相を見せはじめたのが、おおよそいつ頃であるかを推測することができる。ただし、これは英国国教会に属する教会の記録にしたがったものであり、非国教会系の教会の情報はふくまれていないので、この表によって当該の年代におけるウェールズ全域の言語分布状況がわかるわけではないことは注意しなければならない。

十八・十九世紀におけるウェールズ語の衰退と教育

表にのっている教区は39である。そのうち、ウェールズ語単独使用から英語との二言語併用に変わった教区、ウェールズ語から英語の単一使用に変わった教区と、二言語併用から英語使用にと変わった教区（記号では WB, WBE, BE の教区）は19にのぼる。それらの教区について、まず英語使用へと強い変化をしめした地域（WBE, BE）についてみると15の教区があり、それらの教区において英語使用が支配的になったと考えられる時期（表の記号では4と5）は、1800年前後が3教区、1850年前後が3教区、1900年前後が7教区、1906年が2教区である。したがって、1850頃から20世紀初頭にかけて、ウェールズの言語状況が大きく変わっていったことが、ここでみてとれる。

18世紀中葉からイギリスでは他の国々に先駆けて産業革命が進展し、しだいに世界に覇をとなえる大国になる。そして、産業が発展してゆくにつれて交通網の整備もすすんでゆく。道路に関しては、1663年に開始された有料道路の建設からはじまり、1770年にはロンドンからイギリス各地方に放射線状にのびた道路網が完成した。鉄道は1825年にストックトンとダーリントン間で石炭輸送用の鉄道が敷設されて以来、1850年代には鉄道網の整備がほぼ完了する。

さらに、この時期に石炭の産出量が飛躍的にのびた。それは、この時期の工業生産の主要な動力源が蒸気機関であったため生産活動に要する石炭の需要が伸びたこと、同時に、その生産活動にともなう原材料や製品を運搬する交通機関である鉄道や船舶の動力源が石炭であったことによる。また、この輸送手段の発達とともに石炭が海外に輸出されることにもなり、イギリスからの石炭輸出は1860年には200万トン以下にすぎなかったが、1891年頃には1千250万トンを超え1914年には2千978万トンを超えることになる。そうした状況を背景に、石炭の供給地としてのウェールズが重要性をまし、そこに人口流入をまねいた。ウェールズ語人口はそうしたイギリス社会全体の変化と歩調をあわせるように減少していった。表1を見ると、そのことが確認できる。

さて、産業構造の変化および社会構造の変化にともなって人口がどのように変化したかを知るためには、人口の自然増ではなく、流入人口、しかも短期の移住者ではなく、地域に定着した人口の増加に注目しなければならない。短期の流入者は地域の言語や文化に変化をもたらすほどの影響は与えないが、定住者は、当然、定住先の言語・文化の状況を変えるからである。その実例を北東ウェールズに位置する Flint と Denbigh の二つの州についてみることにする。

Denbigh 州の北部に位置する St. Asaph では伝統的にウェールズ語使用が支配的であった。さらに、同地では石炭産業が発展をみせなかった。この、St. Asaph では、1841年から1910年にかけて、流入人口が増加する傾向をしめしており、その平均の増加率は4.7パーセントである。しかしながら、1861年から1870年にいたる10年間には4.7パーセント、1881年から1890年にいたる10年間には6.3パーセントの減少がみられる。それに対して、イングランドとの境界付近の炭坑地帯にある Hawarden では、同様の期間に、平均24パーセントの流入人口の増加をしめした。ここでは、St. Asaph とはちがって人口流入が減少した期間はなく、一貫して増加していった。

さらに、北東ウェールズ全域をみると、流入人口は平均14.2パーセントの減少をしめしている。この数値を背景にすると、炭坑地区にあった Hawarden に実に多くの人口が流入したことが実感できる。したがって、この時期のウェールズでは石炭産業という、成長可能性を秘めた産業がある地域は

表1 英国国教会派の教区で用いられた言語
Classification of Long-term Language Trends, c. 1750-1906

Country/Parish	Language status					Trend classification
	c. 1750	c. 1800	c. 1850	c. 1900	c. 1906	
Anglesey						
Aberlfrw	1	?	1	1	1	W
Beaumaris	4	3	4	?	4	bE
Montgomery						
Garthbeibio	1	1	1	1	1	W
Llanerfyl	2	1	1	2	2	aW
Meifod	3	3	3	2	2	B
Castell Caereinion	3	4	3	5	5	BE
Llanfair Caereinion	2	3	3	3	4	WBE
Carmarthen						
Llanfihangel-ar-arth	1	1	1	1	2	W
Abergwili	3	3	2	2	2	aW
Kidwelly	3	?	3	3	3	B
Llandybie	3	3	2	3	2	B
Laugharne	5	?	5	5	5	E
Ferryside	1	?	5	5	5	WBE
Denbigh						
Betws-yn-Rhos	1	1	1	2	2	aW
Chirk	3	5	5	5	5	BE
Erbistock	5	5	5	5	5	E
Colwyn Bay	1	1	4	5	4	WBE
Flint						
Llanasa	2	2	3	2	2	aW
Treuddyn	1	1	1	3	3	WB
Halkyn	3	3	3	3	3	B
Pembroke						
Morfil	?	1	2	1	1	aW
Llandeloy	?	3	2	3	3	B
St. Dogwells	?	2	3	5	4	WBE
Caernarfon						
Beddgelert	1	1	2	2	3	WB
Conwy	3	3	3	4	4	BE
Denio	1	1	3	4	4	WBE
Glamorgan						
Cadoxton-juxta-Neath	1	?	3	?	3	WB
Cardiff	5	?	5	?	4	E
Bonvilston	1	4	5	?	5	WBE
Cardigan						
Llanerchaeron	1	2	3	3	3	WB
Aberystwyth	?	3	3	3	4	BE
Monmouth						
Llanfoist	3	5	5	?	5	BE
Llangibby	4	5	?	?	5	bE
Cwm-iou	1	3	5	?	5	WBE
Brecknock						
Llangorse	?	3	1	5	5	BE
Hay	?	5	5	?	5	E
Aberysgir	?	1	1	5	5	WBE
Randor						
Cregina	4	5	5	5	5	bE
St. Harmon	1	2	3	5	5	WBE

表中の記号：1 ウェールズ語使用。2 主としてウェールズ語使用。3 二言語併用。4 主として英語使用。5 英語使用。

W 一貫してウェールズ語使用。aW はば、ウェールズ語使用。二言語併用を経て、ウェールズ語使用。WB ウェールズ語使用から二言語併用。WBE ウェールズ語使用から二言語併用を経て、英語使用。B 二言語併用。BE 二言語併用から英語使用。bE 主として英語使用。その後に、英語使用。E 英語使用。

(Coupland, 1990にもとづき、文脈にあわせて整理した。)

十八・十九世紀におけるウェールズ語の衰退と教育

表2 Population in the major language zones of north-east Wales¹, 1801, 1851 and 1881
 Actual numbers, not percentages, are shown in italics.

		1801 %	1851 %	1881 %
Welsh + mainly Welsh	Population	48.1	45.3	20.3
	<i>Parishes</i>	<i>63</i>	<i>60</i>	<i>25</i>
Bilingual	Population	23.6	30.0	27.9
	<i>Parishes</i>	<i>12</i>	<i>16</i>	<i>37</i>
Mainly English + English	Population	28.3	24.8	51.7
	<i>Parishes</i>	<i>15</i>	<i>14</i>	<i>28</i>
North-east Wales regional population		104,510	101,220	101,219
Total number of parishes		<i>90</i>	<i>90</i>	<i>90</i>

¹ The administrative counties of Denbigh and Flint as constituted 1801-81.

(Jenkins, 1998より)

他地域の住民にとって魅力的であり人口の流入をうながしたが、他の地域は魅力が薄いものであった、ということが感じられる。さらに、この新たな住民がどのような地域から流入してきたかをみると、ウェールズ内からの移住はおよそ5パーセントから、高いときでも7パーセントをしめしたにすぎない。それに対して、イングランドからの流入人口は低いときでも30パーセント近く、多いときには53.5パーセントに達している。こうした人口動態がウェールズ語に与えた影響は表2をみれば明らかである。イギリスの産業社会化の基盤整備が完成したといえる1851年をはさんで、ウェールズ語人口の減少と英語人口の急激な上昇は、好対照をなしている。

つづいて、Glamorgan 州に注目する。南ウェールズに位置する Glamorgan には、北部に広大な炭鉱地帯があり、北東ウェールズと共通性がある。だが、Cardiff という石炭輸出の一大基地を擁しており、石炭産業だけではなくイギリスの対外貿易の拠点であったという点で北東ウェールズとは異なっている。

まず、北東ウェールズと Glamorgan の人口増加率を比較してみよう。1841年から1910年にいたる間、北東ウェールズでは平均6.3パーセントの人口増加があり、それに対して、Glamorgan では30.9パーセントの増加があった。北東ウェールズの流入人口は平均で14.2パーセントの減少をしめしていたが、Glamorgan における流入人口の増加率をみると、同時期に、平均およそ40パーセントの増加率があった。そのうち、ウェールズ内からの流入人口増加率は15.7パーセントであるがイングランドおよびスコットランドなどからの流入人口の増加率は63.5パーセントをしるしている。他はイギリス以外の国々からの流入である。北東ウェールズと比較して、Glamorgan にはきわめて多くの移住者があったことになる。この Glamorgan の中心地のひとつ、Cardiff は対外貿易の拠点として他の諸都市とは比較にならない膨張をした。その結果、1851年には18,351人であった人口が1911年には182,259人とほぼ10倍にふくれあがっている。1831年から1891年までの期間をみると、農村部は2倍の人口増加率であったのに対して都市部の人口は20倍の増加をしるした。

Glamorgan 地域の中心的都市である Cardiff はイギリスの海外貿易の拠点として発達した。1839年

の the Bute West Dock をはじめとして、二十世紀の初頭までに（1859, 1887, 1907年）4つの港湾設備が建設された。また、それにともない、旧来の市街が取り壊され新しい商業地区が整備された。そのために、旧来の住民は周辺地区に移らざるをえなくなり、かわりに貿易業務に従事する者たちがヨーロッパ各地から移住してきた。

こうした状況から、Cardiffにおけるウェールズ語ははなはだしく衰退した。例えば、1891年の国勢調査によれば、20歳以上30歳以下の住民のうちウェールズ語をはなせる者の比率は36.5パーセントであったのに対し、20歳以下の住民には14.8パーセントしかいなかった。この数値をみれば、1870年以降に生まれた住民が、産業化と都市化にともなう言語的状況のなかで土着のウェールズ語ではなく、英語を主として習得していった状況が推測できる。

さて、イギリスの国勢調査に使用言語に関する質問項目が設定されたのは1891年からである。その調査によって明らかになった、ウェールズ語話者の割合を下に表にまとめてみる。ここまでの記述は Denbigh, Flint, Glamorgan に限定したが、下の表には中西部の Cardigan の数値を加えておく。紙幅の都合で詳述はできないのであるが、Cardigan は 'inner Wales'、あるいはウェールズ語の 'Heartland' と呼ばれることもあり、他の地域に比べればわずかにではあれイギリスの産業社会化の影響を受ける程度が低かった。また、その地域の中心的な都市、Aberystwyth では現在なおウェールズ語が日常的に使われていて、比較的良好な状態でウェールズ語が維持されている。

county	1891	1901	1921	1951	1991
Denbigh	80.2	61.9	48.4	38.3	18.1
Flint	72.9	49.1	32.7	21.1	
Glamorgan	55.1	43.5	31.6	20.3	9.9
Cardigan	95.5	93.0	82.1	79.5	43.1

*数値は人口に占めるウェールズ語話者のパーセンテージ。

1991年の国勢調査においては、基本となる行政区画が変更になった。そのため、従来の地域区分に該当する地域の数値をのせた。Denbigh, Flint には地理的にほぼ重なる Clwys の数値をのせた。炭坑がなく、他の北東ウェールズや Glamorgan のように産業構造が激しい変化をみせなかった Cardigan において、比較的に良好な状態でウェールズ語が残っていることをみると、いわゆる近代化がウェールズ語に及ぼした影響の大きさが、はっきりとあらわれている。

2 ウェールズにおける教育と言語

前にもふれたが、ウェールズは1536年にイングランドと政治的に統合された。だが、その後、イングランド政府がウェールズ語排斥のためのあからさまな政策をとったことはない。確かに、1536年の統合令では、イングランドであるかウェールズであるかを問わず法廷では英語を使用することが定められていて、ウェールズ語使用者が社会的にみて不利な立場に立たされた。だが、前節でみたように、ウェールズ語に直接的な打撃を与えたのは、むしろ、近代的な産業構造とその社会的基盤が確

十八・十九世紀におけるウェールズ語の衰退と教育

立してゆく過程でもたらされた人口の流入であり、そこで生まれたウェールズ語保存に不利な社会状況であった。

様々な研究者が、ウェールズ語に致命的な打撃を与えたのは1870年の教育令だといっている。この法令によって、初等教育が義務化され、英語が教育の場における公的な言語になった。だが、この教育例が、いわば、「民族的」な統一を図ったものとはいえない。むしろ、産業化が進展するイギリス国内に鉄道その他の技術革新の成果をより効率的に一般化しようとしたためであり、功利主義的な意図が強くあらわれている。その問題を以下でみてゆきたい。

1847年の Report into the State of Education in Wales 以前のウェールズでは、宗教・教育・言語がわかちがたく結びついてたという²⁾。だが、それは思想・信仰の自由、あるいは言語の平等性という今日であれば比較的容易に受け入れられるであろう理念があったからではない。むしろ、イギリスのイデオロギーの基盤となっていた国教会の信仰を効率的にウェールズに普及するという、政治的な有効性が認められたために成立した一次的な教育状況だった。当時のウェールズでは非国教会系の宗派が勢力をもっており、19世紀初頭においても英国国教会と非国教会系の宗派とが、ほぼ拮抗する勢力をたもっていたという。

何度も述べたことであるが、1536年の統合令以降、ウェールズ語がイングランド政府によって直接的に抑圧を受けたという事実は、少なくとも19世紀の後半にいたるまではみられない。むしろ、一般的に見れば宗教的な目的にとって地域言語を使用することの重要性は十分に認識されていた。例えば、当時の国教会の規定 (the Thirty-Nine Articles of the Church of England XXIV) には³⁾、教会における礼拝や礼典の執行にあたっては参加者が理解できる言語を用いることが要求されている。さらに、16世紀中頃、聖書をギリシア語とヘブライ語からウェールズ語へ翻訳するという事業が、イングランド政府による認可をえており、この事業の成果に基づいて1588年にはクリスマスまでにウェールズ語訳聖書を一冊買うことという通達が発されている。また、1650年には the Act for the Better Propagation of the Gospel in Wales が成立し、ウェールズにおける聖職者 (Minister of Religion) は、ウェールズ語を第一言語とするウェールズの民衆と意志疎通できるように求められた。そのため、ウェールズ内の聖職者でウェールズ語を話せない者は、ウェールズの外へ出なければならないことにさえなった。

こうしたイングランド政府の政策の背後には英国国教会の教義をウェールズに根づかせなければならないという認識がある。1650年の政令の背後には当時「市民戦争」を遂行していたクロムウェルの政治的・宗教的な目標を支持する聖職者をウェールズ内に配置し、教区の民衆にそれを浸透させるという意図がひそんでいたのである。

18世紀の初等教育⁴⁾においては、教育は宗教教育とほとんど同義であった。当時、ウェールズでの教育に尽力した団体として、The Society for Promoting Christian Knowledge (以下、SPCK と略記する) があった。この団体は言語については柔軟な対応をしており、ウェールズ語が支配的な地域ではウェールズ語を用いて教育を行い、英語が使用できればそれを用いた。1739年には、この団体によって95の学校がウェールズに設置されている。だが、SPCK はイングランド王室への無条件の崇

拝と、国教会の教義を守ることを子どもたちに要求したために、しだいにウェールズ民衆の支持を失っていった。

だが、この SPCK の活動は公平にみればウェールズ語の保存に有益であった。この団体によって多くのパンフレットや書籍がウェールズ語によって出版され、そのため、ウェールズ語が良好な状態で維持される基盤をつくった。

話が前後するが、先にふれた聖書のウェールズ語翻訳の事業も同様にウェールズ語の保存に多大の益をもたらした。この翻訳がなされた当時、ウェールズ語は大きく南部ウェールズ語と北部ウェールズ語とに分かれていた。この翻訳は南部ウェールズ語によってなされ、それが標準ウェールズ語を成立させることになる。ウェールズと同じようにケルト系の言語を用いていたスコットランドではこのような事業が行われなかった。そのため、標準語という一つの言語規範が生まれず、スコッティッシュ・ゲーリックは多くの変異形を生んでしまい、後の衰退を招いたという⁵⁾。ウェールズ語は現在なお二割弱の話者がいるが、スコッティッシュ・ゲーリックはほぼ消滅したと言わざるをえない状況に陥っていることを考えると、その意義は大きい。

この、聖書翻訳やその他の出版事業が実際にその価値をしめすためには、当然、ウェールズの民衆に識字能力がなければならない。この識字能力の普及に尽力したのが SPCK であり、また、そこから出発し独自の教育運動を展開した Griffith Jones であった。

Jones は SPCK に属していたが、教育内容を宗教的ドグマのみを教えようとするのではなく、より地域の生活に密着し、民衆の要求に応じて教育を行った。彼は学校の場所を固定せず3ヶ月ごとに村を巡回してまわる「巡回学校運動」‘the circulating Schools movement’の創始者となった。この巡回学校の教育に用いられる言語は、いうまでもなく、ウェールズ語であった。また、そこで学ぶ学習者は子どもばかりでなく成人も多く、成人向けに夜間の授業も行われていた。

同様の運動に「日曜学校」‘Sunday Schools’があった。この教育運動は18世紀末から19世紀初頭にかけて、非国教会系の宗派によって行われ、ウェールズの労働者階級の識字・読解能力を高めるうえで大きな力となった。各宗派は様々な出版活動をおこない、その活動がウェールズ語でなされていたためにウェールズにおける読書熱を高め広範な読者層を生みだしてゆく。ベネディクト・アンダーソンは出版資本主義の発達で国民国家の基盤を生みだしていったといっている。ウェールズにおける出版活動はもちろん「出版資本主義」とは呼べない。だが、ウェールズの状況をみると、なるほど、出版という事業が‘Nation’という概念を後にウェールズ民衆が形成してゆく基盤を提供したのであった。ただし、イギリスという国民国家‘Nation-State’全体をみると、それが、むしろ国家としての一体性を脅かす、様々な「反体制的」運動をもたらす一つの間接的要因になったことは皮肉でもあった。

日曜学校は、単に言語的能力を民衆にあたえたばかりではなく、ティー・パーティーをもよおすなど、年齢、性別を問わず地域の民衆が一同に会する機会をつくり、地域共同体を形成する機能ももった。Gwyneth Tyson Roberts によれば、この日曜学校があったことでウェールズの民衆は自分たちの宗教性や言語が維持できるものと楽観的な見通しをもった⁶⁾。

十八・十九世紀におけるウェールズ語の衰退と教育

ウェールズ語をとりまく状況が変化をみせるのは、19世紀初頭のナポレオンの台頭の時期である。それに先立つ時期、1536年のウェールズ統合にくわえ、1707年の「スコットランド統合令」the Act of Union with Scotland によって新しい政治的統合体が形成されたため、イギリスは単一の国家アイデンティティを必要としていた。また、ナポレオンの驚異に対抗するためには、従来のイングランド、ウェールズ、スコットランドという境界を維持することは無意味であった。そのため、この三地域の指導者層が次第に一体感を深めていくことになる。

たとえば、1805年にスコットランド出身の国会議員が「大英帝国〔British〕の問題について語る場合、その問題がイングランドのものであろうと、スコットランドのものであろうと、アイルランドのものであろうと、すべてイギリスの〔English〕問題として語るべきである。」という発言を行っている⁷⁾。ここで興味深いのは、まず、British=English という等式をこのスコットランド出身の議員が作りだそうとしていることである。さらに、ここではウェールズに言及がない。すなわちウェールズはイングランドに内属する地域であって、政治的主体でないという意識を持っていたことが推測できるように思われる点が興味深い。

この発言はスコットランド選出の議員のものであるが、ウェールズのエリート層も同様の意識をもっていたと思われる。そもそも、領主階級は伝統的に夏期は領地において経営に専念し冬季はロンドンの社交に出向く、という生活形態をとっており、ロンドンでは英語やフランス語なども使用する必要もあり、従来から多言語使用者であった。また、大学は(1872に Aberystwyth に設立されたのが、ウェールズでは初めて) イングランドのものしかなかったので、知的エリート層はすでに英語の使用者であった。また、ウェールズの言語文化の発展の原動力であるべき文学者たちも、すでに17世紀のうちにウェールズ語での創作活動に自信を失ってゆき、シェイクスピアを生みその後の隆盛へと向かうイングランド文学と好対照をなしていたという⁸⁾。したがって、ウェールズ語は「下層階級」の言語としてとらえられることになり、「後進性」「農村」「粗野」などのイメージをおびることになり、ウェールズ語はウェールズ社会の発展を妨げている一因であると論じられるようになった。たとえば、1866年の The Times には次のような論評が掲載されている。

The Welsh language...is the curse of Wales...its prevalence and ignorance of the English language have exclude the Welsh people from the civilization of their English neighbours....

こうした全般的な社会情勢のなかで、19世紀はじめからなかばにかけて、ウェールズ南部を中心としていくつかの反体制的行動が引き起こされる。例えば、産業化された地域でおきたチャーティズムに関わる抗議運動、農村部でおきたレベッカの乱などである。

議会には、そうした反体制運動の原因・対策を調査する委員会が設置され、報告書が作製された。そこには、反体制的行動を防止する対策として言語と宗教の教育が重要であるという主張がなされた。こうした報告書やそれを基礎とした国政の場における議論をみると、他ならぬウェールズの住民が英語をみずからすすんで受け入れる姿勢を示している点が興味深い。

レベッカの乱に関する報告書では、調査委員の一人がウェールズ住民の言葉を引用しながらウェールズの住民が英語教育を受け入れる可能性があるという意見を述べている。その報告によると、「ウェールズ語を廃止するということを少しもおわせない」‘...if nothing was said about getting rid of the Welsh language’ という条件が満たされ、英語の知識を習得することによってウェールズの住民も「よりよい職に就くことができ、その生活が向上する」ということが理解されれば、ウェールズの住民も英語を受け入れるであろうという、ウェールズ人自身の言葉を記している⁹⁾。

また、レベッカの乱をはじめとした一連の反体制的行動を議論する中で、ウェールズ出身の国会議員によってなされた発言からも、ウェールズ住民の側に英語を受け入れる準備が十分にあったということが推測できる。

William Williams というこの議員は、自らの半生を振り返って、ウェールズの貧しい家庭の出身である彼が呉服商としてロンドンで成功したのは英語を学んだためであると言っているという。そして、ウェールズの子供たちに自分と同じような成功をおさめさせるために、英語を学ぶ機会を与えたいのだと語り、英語は「知識への唯一の道」であり、「改良と文明への道」であると主張している。この発言を今日の時点で、欺瞞やウェールズに対する裏切りであるということははばかれる。おそらく、Williams は彼が生きた時代の大きな流れのなかで、ウェールズとその民衆の利益を思って発言しているのである。

別の報告書から二か所引用する。これは1844年に国会に提出された the Newport Risingn に関する報告書の一部である¹⁰⁾。

If the [Welsh] people had been acquainted with the English language, had had proper instruction provided, instead of being, as they now are, a prey to designing hypocrites with religion on their lips and wickedness in their hearts...they [Welsh people] would be at this moment...the happiest as well as the most peaceful and prosperous population in the world.

I am of opinion (which is grounded on sixty years' experience) that the better the rising generation is educated and grounded on the principles of the Church (to fear God and honour the King) the safer the throne and more glory to God.

Williams の発言や1844年レポートの一節によくあらわれているのは、「文明」「発展」「歴史」「進歩」などの概念を唱道する社会的ダーウィニズムと、個人は環境によって決定されると考える一方で、適切な教育の力で卑しい決定要因を克服できるとした啓蒙主義的な人間観である。だが、それと同時に、当時のイギリスにとって極めて重要であった国家イデオロギーとしての英国国教会の宗教的権威を称揚しようとする、世俗化した宗教性が混在している。ここには、産業化が進展し近代的な諸制度が完成に近づきつつあるイギリス社会において、近代的な社会形態と伝統的な地域共同体に根付いた価値観とが齟齬をきたしていることがうかがえるのである。また、同時に、イギリス政府が近代化を推し進めるために、言語に対して強権的な干渉を強めてゆかざるをえない時代の転換点にあると

十八・十九世紀におけるウェールズ語の衰退と教育

ということがわかる。そして、この国家による言語への干渉は結果的に教育の場における宗教の権威を弱め、教育の世俗化を加速度的に促進してゆくことになる。

この後、1846年のウェールズにおける教育状況の調査レポートが作成され、1870年の教育令によって初等教育が義務化され国家によって管理された教育制度が確立してゆく。同時に、この法令によって教育の場で用いられる言語は英語であることが強制されるようになった。

3 まとめ

本稿ではウェールズ語衰退の原因を、二つの局面において探ることをめざした。一つは、近代イギリス社会の産業基盤が確立してゆく過程で人口の流動化がおこり、そのことがウェールズ語を維持すべき共同体を結果的に失わせたということである。結果的にというのは、この共同体の喪失が政治的意図にもとづくものというよりも、むしろ、産業の発展にともなって、ある意味で、自然に失われていったためである。次に、産業化にともなって、イングランドとウェールズの指導層がウェールズ語に対する姿勢をどのように変化させたかをみた。

重要であるのは、この二つの局面がそれぞれ独立した事象ではないということだ。ウェールズ語を衰退させる要因は、どれもイギリスの産業化のプロセスによってもたらされている。同時に、このイギリス国内の社会的変化が、ナポレオン政権との対立という対外的な要因によって方向性をあたえられ、ウェールズ語を衰退に向かわせる全体的な状況ができあがるのである。そして、この全般的な社会の変化のなかで、ウェールズ語の使用者たちもまた言語に対する意識を変えてゆく。すなわち、英語は新しい社会に適応するための、新しい社会において職を獲得し富を手にするための不可欠の言語であった。このことを倫理的に不当であると非難することはできないであろう。イギリスという国家が、歴史の新しい段階に適応しようとしたように、ウェールズ住民もまた自分たちの共同体がこうむった変化に適応せざるをえなかったただけだ。そこには、ほとんど選択の余地はなかったはずだ。

最後に強調しておくべきなのは、ウェールズ語はそれにもかかわらず消滅しなかったということである。同じ、ケルト系の言語であるスコットィッシュ・ゲリックやアイリッシュと比較して、ウェールズ語は保存状態が良いといわれている。独自の教育制度や通貨を有しウェールズに比べれば自立の程度が高いスコットランドで、なぜ固有の言語がほぼ消滅してしまったのか。ウェールズの民衆にとって、自己のアイデンティティを守り、抵抗の姿勢を示すほとんど唯一の方法が言語を守ることだったからだ。ウェールズ語衰退のプロセスは二つのことを示している。まず、ある言語の母胎となる共同体が変質するとき、その言語は衰退の危機に見舞われるということである。同時に、矛盾するようであるが、言語は外からの圧力だけでは滅びない、その言語を使用する人間にとって他に代えがたい意味を有している限り存在し続ける可能性がある、ということも示している。

注

- 1) 本稿においては、英国に関わる名称を便宜的に次のように統一して用いることにする。

United Kingdom イギリス England イングランド

Wales ウェールズ Scotland スコットランド

- 2) Roberts, 1998, p. 25.
- 3) the Thirty-Nine Articles of the Church of England, XXIV. in Roberts, 1998, p. 11.
- 4) 当時のイングランド、ウェールズではいわゆる「上層」の階級に属する子弟は、通例、過程ごとに家庭教師を雇い教育を施していたので、以後の議論の対象にはしない。また、高等教育機関としてはイングランドに Oxford と Cambridge 大学があったが、ウェールズに大学はなかった。したがって、当時からウェールズにおいてもエリート層は英語を自由に使いこなしていた。
- 5) Agnew, 1981.
- 6) Roberts, 1998, p. 30.
- 7) Roberts, 1998, p. 11.
- 8) Davies, 1999, p. 27.
- 9) Roberts, 1998, p. 23.
- 10) Roberts, 1998, p. 24.

参考文献

- *本文中のウェールズ語関連の数値や歴史的事実に関する記述は、様々な資料にもとづいておこなっている。そのため、参照箇所をすべて明記しては、あまりにも煩雑になるので、必要があると考えられる場合（著者独自の見解が述べられている場合、一次資料を参照することができなかった場合など）をのぞき、参照箇所を明記しなかった。また、数値に関しては、基礎資料をもとに鈴木が計算をした場合もある。
- Agnew, J. A., 1981, *Language Shift and the Politics of Language: the Case of the Celtic Language of the British Isles*, in *Language Problem, Language Planning*, Vol. 5, Texas, University of Texas Press, pp. 1-10.
- Aitchison, J. & Carter, H., 1994, *A Geography of the Welsh Language 1961-1991*, Cardiff, University of Wales Press.
- Anderson, B., 1983, *Imagined Community*, London, Verso.
- Baker, C., 1985, *Aspects of Bilingualism in Wales*, Clevedon, Multilingual Matters.
- Coupland, N (ed.). 1990. *English in Wales*, Clevedon, Multilingual Matters.
- Davies, John. 1990. *A History of Wales*, London, Penguin Books.
- Davies, Janet, 1999, *The Welsh Language*, Cardiff, University of Wales Press.
- Jenkins, G. H. (ed.), 1998, *Language and Community in the Nineteenth Century*, Cardiff, University of Wales Press.
- Jones, M. C., 1998, *Language Obsolescence and Revitalization*, Oxford, Oxford University Press.
- Kleif, Bud B. 1980, *Language, Ethnicity, and Education in Wales*, The Hague, Mouton Publishers.
- Morgan O. K., 1963, *Wales in British Politics*, Cardiff, University of Wales Press.
- 1981, *Rebirth of a Nation—A History of Modern Wales*, Oxford, Oxford University Press.
- Roberts, G. Tyson, 1998, *The Language of the Blue Books*, Cardiff, University of Wales Press.
- Smith, R. 1999, *Schools, Politics and Society—Elementary Education in Wales, 1870-1902*, Cardiff, University of Wales Press.

(すずき・てつや、法学部専任講師)